哀歌は流れる

高樹のぶ子

新潮社

哀歌は流れる

高樹のぶ子

新潮社

哀歌は流れる

一九九一年一月二〇日印刷
一九九一年一月二五日発行

著者　高樹のぶ子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―三二六六―五一一一
（編集部）03―三二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八
印刷　大日本印刷株式会社
製本　大口製本印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

Nobuko Takagi 1991, Printed in Japan

ISBN4-10-351604-6 C0093

哀歌は流れる＊目次

十四年目のイヤリング　7
岸辺の家　45
菊五郎の首輪　81

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

画家の庭　117
冷たい猫　149
生命(いのち)のしずく　183

装画　山本容子
装幀　坂川栄治

哀歌は流れる

十四年目のイヤリング

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

地下鉄の中野新橋で乗りこんできた学生風の女の子三人が、遠野美和子の前に立って、ひきつるような笑い声を混じえながら教師だか先輩だかの悪口を言いはじめた。その声が鬱陶しくて、美和子は、方南町に着く前にシートを立った。

立ち上がってすれ違いざま、三人のうちの一人のイヤリングが、美和子の鼻先をかすめた。ピンクの菱形で、耳朶から重たげに垂れていたのと、それをぶら下げる銀色の細い針金が、白い耳朶を貫通していたのを、目の前を通りすぎた一瞬の景色として記憶した。それは、車輛が方南町のホームにすべりこみ、扉が開き、歩き出してからも、美和子の視野に二重写しとなって浮かんでいた。

あんな重いものをぶら下げて、穴が大きくなったら、どうするんだろう。

ニューギニアのどこかに、子供のうちに耳に穴をあけ、重いものをぶら下げて耳朶を引っぱり、果ては首に巻きつけるまでに長くする部族がいた。耳朶の長さが美女の尺度になるのだという。テレビで見たとき、女達の耳は細い紐のように肩に垂れていた。

あんなことにはならないと思うものの、美和子は、穴があいた耳を想像すると背中にゾクッと不快感を覚える。細い金属の棒を差しこむときの感覚を想像すると、風邪でも引きそうな悪寒にみまわれ、何かの拍子に強引な力で引っ張られたら、などと考えようものなら、ちぎれて血のし

たたる耳朶と激痛が我が身に乗り移ってきて、思わず悲鳴をあげてしまいそうになる。
おお嫌だ――
環状七号線に沿ってアパートに向かいながら、いつのまにか耳に手をあてていた。
神田川を渡りきったあたりで背伸びをし、溜息をついた。
雑誌社勤めも十五年目で、一人暮しを寂しいとも思わなくなっているが、紫色の暮色に囲まれてこのあたりを歩くときは、誰かに寄り添っていて欲しい心地になる。
二カ月前に従妹の梢が癌で死んで以来、思いがけない心細さが意識の隙間から顔を覗かせる瞬間が多くなった。梢は結婚し、東京の西の郊外に住んでいたわけだし、そう頻繁に顔を合わせていたわけでもないのに、もうこの世のどこにもいないとなると、これまでの人生の重要なページが、まとめて破り取られたような落胆を覚える。
アパートの玄関まで来たとき、ふたたび、地下鉄の中で見たイヤリングを思い出した。あのとき感じた、鋭いような特別な感覚も、どこかで梢の記憶につながっているらしかった。

十四年前、美和子と梢は、同じアパートの二階と一階に住んでいた。
美和子は大学を出て今の雑誌社に就職したばかりで、梢の方は高校卒業と同時に重い腎臓の病気にかかったために進学が遅れ、二十一でまだ短大に在籍していた。
子供のときから姉妹のように馴染んできたせいで、夕食をどちらかの部屋で一緒に食べたり、洋服を貸しあったりした。お金の都合をつけあったりもできて、何かと便利だったのである。
二人の共通のたのしみは、土曜の午後の英会話講座であり、そのあとのレッスン仲間との外食

やお喋りだった。講師は高校で英語を教えている大道治。子供時分イギリスで暮したことがあるとかで、皆の評判はよかった。もっとも、人気があった理由のひとつは、彼が少しも講師らしくなく、レッスンが終ったあとも、受講生と気楽に食事や酒につき合っていたことにある。年も当時二十五か六で独身、ひょろりと高い体のてっぺんに、小さめの頭が不安定に乗っていた。笑うと少年のようなはにかみが浮かぶものだから、レッスン中でさえも、親しみをこめた冗談やからかいの対象となった。

あるとき、五人ばかりでスナックで飲んでいたとき、梢が言い出した。

「これからうちへ来ない？　お酒屋さんに寄ってウイスキー買って……ついでにおつまみも仕入れて」

「それがいいわ、そうしよう」

と賛成したのは、酒に強い学生のM子で、そこにいた全員が、梢の部屋に移動することになった。なかなか腰を上げなかったのは治で、皆にうながされて、ようやく立ち上がった。

内心驚いたのは美和子である。これまでの梢を見ていて、多人数とはいいながら自分の部屋へ男性を呼び入れるなど、考えられないことだった。新しいことを思いついたり実行したりするときは必ずと言っていいほど美和子に尋ねた。その臆病さが子供のころからの病身から来ているとわかっていても、ときには歯痒く感じることさえあったのだ。

さらに美和子を驚かせたのは、梢の部屋の冷蔵庫の中に、サラダやチーズ、そのうえおにぎりまで用意されていたことだ。おつまみを仕入れて帰ろう、などと言っておきながら、何もかも用意していたのだった。

その夜は結局、二時近くまで梢の部屋で飲んで、皆はタクシーで引き揚げていった。女達の騒ぎ声の賑やかさに較べて、治は静かだった。バーやスナックではなく、女の一人住いに押しかけてきていることに、遠慮がはたらいていたのだろう。

後片づけを手伝いながら、美和子は何気なく訊いた。

「……こんな準備、いつしたのよ」

「準備っていうほどのことじゃないけど、そうなってもいいなって思って」

梢は満足げに、浮きうきしてガラスコップに洗剤をまぶしていた。

「そうなっても、って？」

「え」

「いや、いいのよ」

「スナックって、何となく照明が暗いでしょ？　私、頭が痛くなっちゃうの……みんな、よろこんだと思う？」

「もちろん」

「治先生、今夜は大人しかったね、いつもと違った感じで……」

梢は、美和子に顔を向けないまま言ったが、美和子は台所に立つ彼女の横顔を盗み見た。鼻筋が通った細い顔が、まぢかな蛍光灯のせいで青白く映え、つねづね高校生と間違われるほど幼く見えるのに、その一瞬は、変になまめいて見えた。実際それまで、化粧をしない梢は、肉づきの悪い体型のせいもあって、どこか未成熟な貧弱さを印象づけていた。

「梢ちゃんは、ああいうタイプの男が好み？」

と、美和子も手を動かしながら言った。
「ああいうタイプ？」
「つまり、大道治のタイプ」
少しのあいだ答えを探していた様子だったが、
「そうでもない。私、病気ばっかりしてきたから、逆にもっと、何ていうのかな、がっちりしたタイプの方がいい」
ぎこちないほど高い声で言う。
「へえ、そうなの」
「人間って、自分に欠けてるものを相手にもとめるんじゃない？」
「まあ、そうね」
「誰だってそんなものよ」
乱暴にガラスコップを置き、鼻歌などうたい始めた。
誰だってそんなものよ、ということは即ち、大道治もまた、ひょろりとした痩せがたの、自分と共通点を持つ梢なんか、好きなタイプではない、と訴えたかったのか。
梢の部屋を出て、鉄製の外階段を足音をたてないように上りながら、美和子は少し辛い気持になっていた。
もしも梢が治を男性として意識し、恋心を覚えたとして、それは梢にとって無残な結果に終りそうな予感があった。というのも、いつも群れ集う女達のなかでも、梢は決して目立つ方ではなかったし、むしろ地味で、男心を刺激する特別な何かがありそうになかったからだ。

いや、美和子が辛く感じた一番大きい理由は、そんなことではなかった。

いかにもバランス悪く感じられていた治の長身が男くさく見えてきたり、少年っぽさの残る笑顔が突然初々しく迫ってきたりするこのところの自分の変化に、美和子は気づいていた。何か言いだすたびに前髪を掻き上げる仕草を前にして、思わず目をそらしてしまうのは、それを見ている自分の目に、特別の感情が走るのを恐れるあまりなのだ。

このところ、治の目を見て話すことが極端に少くなっている。何か手を動かしながらだとか、梢と頷き合いながらであれば、けっこう治との会話も弾むのであるが、彼と目を合せたとたん、話の脈絡が崩れてしまうのである。

治も梢も、美和子が話し始めるとすぐに受け身にまわり、何にでもとりあえず頷いてしまう方だから、美和子はいつまでも話の主役をつとめることになった。話の起承転結、それも結におまけつきのひとことまで言い切り、相手がうんうんと解った顔をしないことには収まりがつかないはずなのに、近ごろは治の目に摑まったとたん、筋道がぷっつり切れてしまうのだから、ぶざまといったらない。

ぶざまなのは仕方ないとしても、その理由を治や梢に気づかれるのは困った。いきおい治に対して、不自然にそっけなくしてしまうのだった。

梢はともかく、治は気づいているかもしれない——

そう考えるといよいよ彼に対してぶっきらぼうな口のきき方になった。

梢が治を好きになっては具合悪いな、という消極的でエゴイスティックな感情が、押さえようもなく美和子の中に湧いてくるのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com